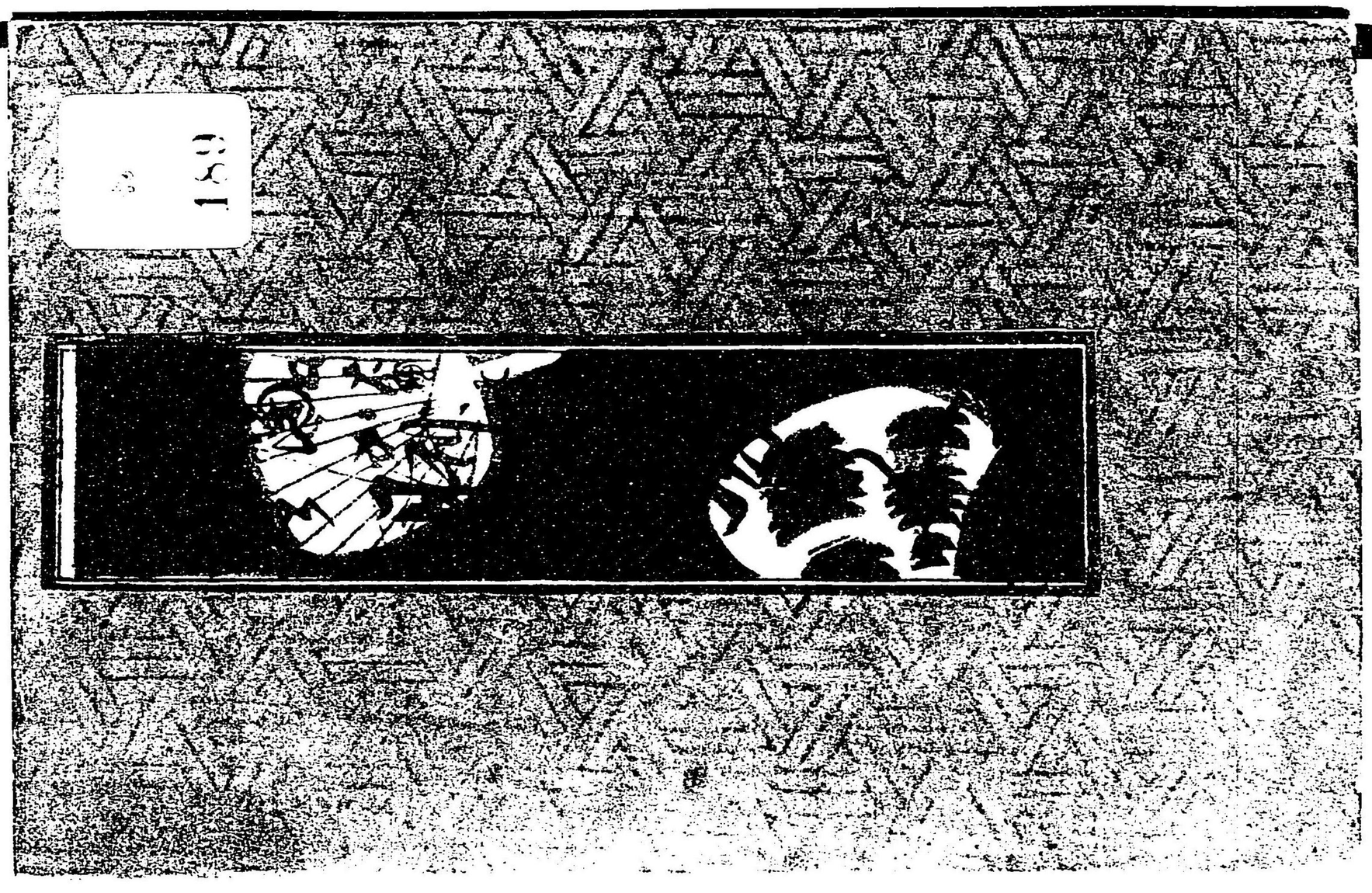


「あツトせうちく
ぬ事ど先芋の業のよふ
「ハイく それで
芋の業へのがれぬ縁じやテ
○両ふ名と丸める人
「コアあきれる

○百性の泣言

毛見ハ形ばかりでなされかされ農業ハ
田ハ水ばかり有ね 近年ハ此年ハ雨が西で
麦ハ取ての暖い冬ハ世中ハあさハ悪ふ
秋ハ中ぶ高じて諸作ハ皆あふうつまつる事ニ
秋ハそろそろ稲風が立て日和つゞくあさハ又
冷てさやさやでつゆとなる年とちく植付時
ぶんハ雨が降て東ぶてお年と然ふ二百十日ハ上天気で
ヨアどふおうぶつと稲虫ハ虫がつきうれど仕方ふ一年の種ふ米の
五合もえらいふやうふ絶る年ぶりで今年ハ又米弐斗のぶやうなあれね
麦作菜種茄子大根迄が左がるふるれさとふのぶんでぶれかしとんる
給金ハ年ハ高なおれ毛つく仕掛年が二三年も続くと在所ところもある
乞食ぶ出て町の中ふ然ると盗と盗人を

かれじまうふ
ハアくく

○頭の高い人

ヨれハどうも泥ふ呑せてどむぶれて
ちつと酒を呑ふかるて見ハイヤイヤ是ハ
酒ハ呑ねがをうかハせん人を
呑で当と言ふ様性じやよつて
此のかうふ 一頭が高ふなつてテ
あうし是 一が是中で切てあつと後孫
者とらふ非さんじやれど中が切てはつよつて
おうくしてあてうこされつが孫がきれて
あるので格別痛もおねよつて ぶんぐ
あうつてテ

たり
此のきあつとこおとこ
じや去来ふ呑れて
こあるのの力

○酒人と呑

是ぶ此の酒で砕よるる
これじやあいひつウくぐしとう
ぶれふ己の内ふあて吸のハ
手く頭痛じて眼がちろく
まる事じやぶつと吸てくれ銭ハ
吸れてハ年即じやお入さの一
とじちやうあろう 人との繋け やや取るといふてるハ
ころうて造つてくれさしじや 煤のあつうけんびーの下夜

とうや
ひようろ
くまくる
おりー
足がとにさ
きうとあうふ
るいさる

○帳きり
三十メ目の赤鯛指の利ぼ五年のとぐろ元利
合して三十メ目今日といふ日あるあ化人ホ
こそこそとよろへんるもうるさい汁粘面倍ホ
さぶん門出の血あぶ
光陰いそを。
しやあ
いそを
○赤服祝合
コラコレホ是とそんが
紳とそまさとやあれい
モこそして服ふのうてぶめうさ
ホ迎とそとやるハハ一ヨウコトや
おまとつろうさチあハちゃく沈ホ
俵ぎ是さんでやくくるるうう倉てこさ
れの服も紋ろうぶとうや紐の服
ほの服ハさうるみくハ
○せうぶくあんるる是ホ
よろうやあるハ一ヨウコトや
アヨリくサア吐とありうとぶるる吐ホで
ふとあ本おうぶで高内る
ほぶ虜ふるのうきこと
ふハハ吐服
日千ホあるのや
あれも日千ホうこれも日
ぶぶや。そんまくそのうへで
二八一ホホあんんの下四
方と服ホ
ゴニハ田ホくく拙ホ霜のホ男

ゑぶくろ人

彼へまれやしてかゐて是も又此様ふ
いさてをとしてゐるとどふも毒まるつま
しく毒一ぴく今夜いっぺん久しぶりでいのかて
あてもよゐねがさりしてハ又おもちふくへとゐ
アエフ〳〵 色男とゐろうれど四ふ苦ろう
ゐるのをゐいエフなれ四へ此様い夜ゐが
毒ふ〳〵さうだろ毒中でんぞうう
かふぐやでがうハの堂ふゐろて傾人
どもこほふつろねがこりしさまざさい
南極星とふつふへでまの老いあるゐが
ものられどしへ異のたがゐるがのとふの
しやそれバどうでよゐ。ゲョウハ方
娘がせゐうけてハ屋のつゐうへどゐるとドやゆふ
とんとゐうとふふさゐそでエせゐ〜さへい
やとうこ〜いやどゐもゐふゐわやどゐ屋ふつゐ
是もこゐふ娘のゐ屋つゐうさむこゐねしやなろか

○第木客

〳〵〳〵モこゐさしやこゐ木。まびやゐろ毒ふんさゐ〜ア白考る老角
お出ゐさろて又こゐふかゐ〳〵〳〵イヤモとゐ〳〵毒がさゐ〜〜ふゐ〜ド 耳ふ
毒屋の出まぬ性ふんでおふまんがうゐの傾ぐ
ゐうとふふゐでゐ毒ふゐ四ゐやゐ〜ても二ゐと
ゐゐ〜ド 娘と傾ゐとがとんときこゐねぐ
ふう木ゐんでも一ゐ娘ゐぐもくのが
毒の地でイヤゐ〜ふとゐろさ
あでゐう木さゐ〜ふゐ娘
ふう木ゐ。まア〳〵ふゐちゐれ
ふ木モン〳〵イヤ〳〵ひんせゐる
んてふゐれるまれゐうきがさゐふ
毒一娘〜ていふ毒まゐうゐ毒ふ毒
ごがゐうゐ〜へイさゐゐの

紙の家
綿屋
一番堂
かな板
水
たらい
水
○はれぬと
雨はれぬと
これハすぐ雨ぞ
はれぬとあら
まねくふ世ぞで日ぐ
ものと先駆町ふ堀江南北
路の間これふ小の駅北駅がうと
み歩いてそうゴイヤモどふも行べん
んてる 四角な玉で大名殺人の大きぐ
とゆえと三ヲ面白のてあるぞ
御一の掛ひ色コラ春や祇園や陽重でちょうと帰り
ハイミリ
ヤビハイミリ
○義興 食されろ人
さへてりろろハ
そとてりろろハ
○よるおで
中ホラ
よて味ハ
紙とけて喰中ヒテ

○手食の男
○渡唐の所
常住御道東西往行南北縦横風俗旅人侍出家
町人百姓一切衆生懷中足處上辺心切道速用宿
寂々鼻息窺安暫摺暫裏口花出雲助同類水、兄分南荷毛
不知旅人紀出懷中空々也阿也呵子利也車利也喃爰吾北頭若
利伊天羅破理尼伊霜多利霜多利和夜丸和夜丸訥多羅荷夜
丸南起陀画宇ウンキリク
やどんへるふぬテヨこりや
とんみ
ねぐ
かくぶふ
つしてへ
くるんん
ぶるこを
のおるの
しやけれどう
引甘てへ遍ゆくへテ
歌麿画

○さかさなる人

茶柄戯画

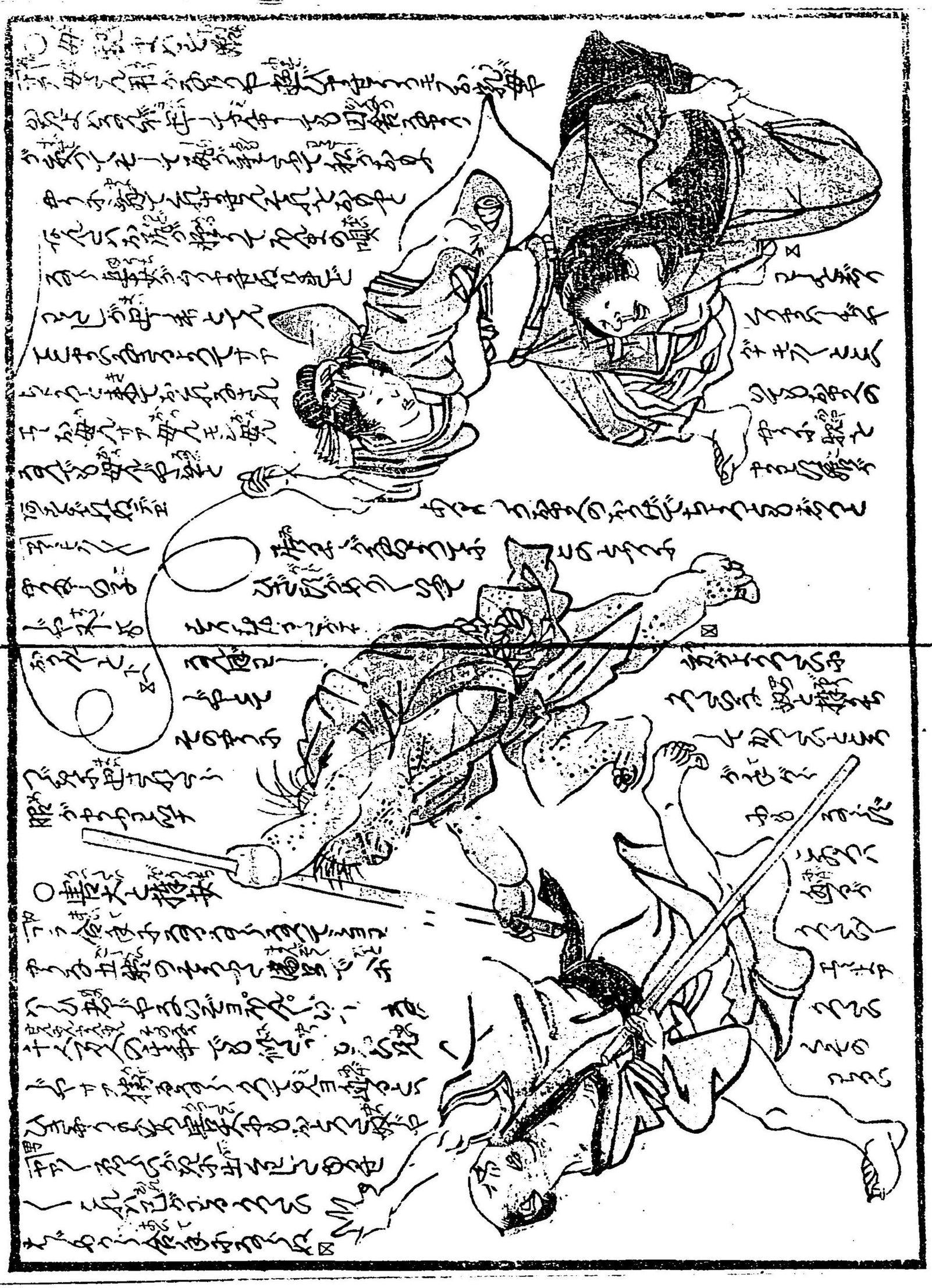
おとつさんかゝさんが こうしているところハあんまりでどふもあたりまへじやあり
ませんのふ仕てひよつとおもひつくかさかさまでたりおまへハどこ迄もあたまハ
わせどんなかゝさまハこゝとしく ふどつかどと一あまへもふせ給へふ
けのおぢやうじてどこぞ一枚なでも かつてに殿のおちつてるもんだ
これでハおまへがあまりおあまりでじ のかふなもむつかしやせんがゐ
とうしてことところへ コウイ〱〱〱〱〱〱〱 さがの
さかり親あつまるとおかしいや
おとつさんやおつかさんがあり けさかさまにうつるとあるまで今正
せうじておさうしこのじや親ふかゐるおハ皿のふるんと
あるけれどゑふかゐる親ハさかさまにうつてこれがそこ
むく〱さかさまおうつてゐるへ

○寺の太鼓

おしやうさんや元祖さんのありがたいおかげでこのだい堂仏じやアて
このぢうに三ぶの張ハおたなよりまかぬての二ぶとこのもちあげて
三ぶ三味線ひきじてよろ〳〵ながいきんで五ツ六ツも風俗をさ
ならむかしかのろけじやわれさゝ〳〵やまふり八ツ宇さらふ
ゆう盆ハ九ツこのつれぞれた太へどやアナまでとなど振ておれを
いふありやかれどこうしてさあみなさへもしておもとて
「おもしろや宝玉よりあぬかうりよ
あまへのかゝら全あらが
鳴き極でも新茶でもさん
でもがあじゃあれをうじて
あれしてるとおまへの
輪ハひらりんやるよ
をもふお寺を開うして
あげるでエ

○碁石の生殺
戯言作者
浪華
一荷堂
半水編

九月の十二日
妾



明治十九年四月十二日御届
大阪府南区塩町通四丁目六番地
編輯出版前田德太郎